

「奥義としての御国」に関するたとえ話 ②

イエスは答えて弟子たちに言われた。

「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが与えられています。しかし、彼らには与えられません。というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。

わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また悟ることもしないからです。」

(マタイ 13 : 11~13)

はじめに

先月から、みやま集会では、イエスが語られた「たとえ話」について学んでいます。テキストは、フルクテンバウム博士の「メシア的バイブル・スタディ」シリーズの中から、「たとえ話」に関係するものを選びました。

福音書の中には多くのたとえ話が記録されていますが、この学びでは、主要なふたつのたとえ話群を扱います。まず、マタイ 13 章、「奥義としての御国」に関するたとえ話群（九つ）、そしてマタイ 24 章と 25 章、大患難期に関するたとえ話群（6つ）です。

今、私たちは、神の国のプログラムから見ると、「奥義としての御国」の時代にいます。初臨のメシアが神の民であるイスラエル民族によって拒否された時から、この時代が始まりました。そして、この時代の終末は、「主の日」とも呼ばれる 7 年間の大患難期です。

大患難期を経て、次の時代（来るべき世）に移ります。それは、地上に建てられる「メシアの御国（メシアの王国、千年王国）」です。従って、「奥義としての御国」の時代は、大患難期の終了とともに終わります。

主要な二つのたとえ話群は、マタイ 13 章が今の時代を、マタイ 24 章と 25 章が今の時代の終末、大患難期を扱うものです。

たとえ話は、題材を当時の身近な生活シーンから取り上げているので、具体的な映像をイメージでき、何となくわかったような気になります。しかし、そこだけを読んで想像を働かせると、どのようにも解釈することができます。読み手によって十人十色の説明がでてくるのは、このためです。

イエスは、はっきりと言われました。イエスの弟子たちには「知ることが与えられている」。イエスは弟子たちに、そのたとえ話が何を意味するのか、教えてくださいました。また、そのようなイエスからの直接の解説がない場合は、旧約聖書でそれは何を意味しているのかを調べると、たとえ話を正しく理解することができます。

この学びの目的は、たとえ話を文脈に沿って読み、語られている意図を正確に把握すること、それによって、「奥義としての御国」の時代に生きる私たちが、今の時代をどう生きるべきか、信仰生活における平安と確信を受け取るためです。

「奥義としての御国」に関するたとえ話

	表題	たとえ話の聖書箇所	解説の聖書箇所
1	種蒔き	マタイ 13 : 3～9	マタイ 13 : 18～23 マルコ 4 : 13
2	種は自分で育つ	マルコ 4 : 26～29	
3	毒麦	マタイ 13 : 24～30	マタイ 13 : 36～43
4	からし種	マタイ 13 : 31～32	参考 マタイ 13 : 4、19 黙 18 : 2
5	パン種	マタイ 13 : 33	参考 マタイ 16 : 6～12
6	隠された宝	マタイ 13 : 44	参考 申 7 : 6
7	真珠	マタイ 13 : 45～46	参考 ダニ 7 : 2～3 黙 17 : 15
8	地引網	マタイ 13 : 47～50	参考 マタイ 25 : 31～46
9	家の主人	マタイ 13 : 51～52	

オリーブ山での説教 大患難期に関するたとえ話

	表題	たとえ話の聖書箇所	内容
1	いちじくの木	マタイ 24 : 32～35 マルコ 13 : 28～31 ルカ 21 : 29～33	メシア再臨の時期を確実に 予想できる事件＝荒らす忌 むべきものが据えられる (その日から 1260 日)
2	門番	マルコ 13 : 33～37	大患難期において再臨を待 つ信者に対する励まし。
3	家の主人	マタイ 24 : 43～44	目をさましていること、備 えをしていること、主の働 きをしていることを勧め る。
4	忠実なしもべと悪いしもべ	マタイ 24 : 45～51	
5	花婿を出迎える十人の娘	マタイ 25 : 1～13	
6	主人の財産を預かるしもべ	マタイ 25 : 14～30	大患難期における異邦人につ いての、信者と不信者との 区別。

奥義としての御国に関するたとえ話 2 番目 「種は自分で育つ」

1. 2 番目のたとえ話「種は自分で育つ」(マルコ 4 : 26～29)

2. このたとえ話の 3 つのポイント

- (1) 蒔かれた種は、自然と芽を出す。人間には説明できない自然界の命の営みである。
同様に、1 番目のたとえ話で蒔かれた神のみことばは、人の内側で生きて働き、人が応答する。新生とは不思議な出来事である。
- ① 福音のメッセージは簡単である。3 つのポイントだけから成る。すなわち、イエスは私たちの罪のために死なれた。イエスは葬られた。そして、イエスは 3 日目に復活した。

- ② このような簡単なメッセージで、どうして人が新たに生まれ変わるのか？それも二千年前に起きた出来事を現代に生きる人々にただ伝えるだけで、その人の人生が新生していない状態から新生した状態へ突然変化するのは、なぜか？ 不思議なことである。
- (2) 種は自らの力で成長する。種は内側にエネルギーを持っている。だから、自然に芽生える。同様に、神のみことばはその中に力を持っている。
- (3) 種が芽生えるかどうかは、蒔く人によらない。種そのものによる。特にその種の中のエネルギーによる。
- ① 神のみことばに、人の考えや思いを混ぜてはならない。文脈に沿って字義通りに受け取ること、書かれた当時の背景や書いた人の意図を素直に受け入れて、神のことばを伝えることが大切である。
- ② しかし、たとえ偽教師が語ろうとも、その中に聖書のことばが含まれていれば、また聖書そのものを人が自ら読めば、その種は生きてその人の内に働く。神のみことばは、その中にいのちのエネルギーを持っている。

奥義としての御国に関するたとえ話 3 番目 「毒麦」

1. 3 番目のたとえ話「毒麦」(マタイ 13 : 24~30) その解説 (13 : 36~43)
2. このたとえ話の 4 つのポイント
 - (1) 1 番目と 2 番目のたとえ話で語られた福音宣教の種蒔きは、真の種蒔きである。これに対抗して、偽の種蒔きが巧妙に行われる。毒麦と訳されている原語が指すのは「ダーネル」という種類で、その種は本物の小麦と外観がそっくりである。
 - (2) 二つのタイプの種蒔きがされた結果、本物の小麦も毒麦も同じ畑の中で、隣り合わせて成長していく。
 - (3) この時代の終わりに判定がなされ、良い種は選り分けられてメシアの御国に入る。しかし、悪い種は除かれる。
 - (4) 真の種蒔きか、偽の種蒔きかは、究極的には結果でわかる。良い実を結ぶか、結ばないかによってその本質的な性質が明らかとなる。
3. イエスによる解説のポイント
 - (1) 種を蒔く人は、イエス、メシアご自身である。
 - (2) 畑はこの世界である。そして、良い種は、御国の子たちである。御国の子たちとは、真理と共にある信者たちである。彼らは世界中に散らばっている。その結果、真理は世界中に伝播される。ここで、1 番目のたとえ話と符合する。
 - (3) 敵はサタンである。そして、毒麦は悪い者、すなわちサタンの子たちである。サタンの子たちとは、不信者である。サタンは、世界中にそのような人々を蔓延させる。しばしば、彼らは信者のようにふるまう。
 - (4) 刈り手は天使たちである。最終的な裁きにおいて、彼らは良い種と悪い種と選り分ける。小麦は御国へ、しかし毒麦はハデス（よみ、地獄）へ行く。30 節の「私の倉」とは、「メシアの御国」と「天（第三の天）」の両方を指している。

奥義としての御国に関するたとえ話 4 番目 「からし種」

1. 4 番目のたとえ話「からし種」(マタイ 13 : 31~32)
2. このたとえ話の 2 つのポイント
 - (1) この「奥義としての御国」は、異常な成長、規模の拡大をしていき、怪物的存在

にまでなる。

(2) この怪物は、鳥たちの休み場所となる。

① 巨大な、そして怪物のようになった、このからしの植物または木の種は、「キリスト教界」を描いている。

② キリスト教界の成長は、異常であり、外面的である。

③ この木は、多くの種類の鳥たちの休み場所となる。

3. このたとえ話の解釈

(1) イエスは、1番目のたとえ話を理解することが、他のすべてのたとえ話を理解するための鍵であると語られた。

(2) 1番目のたとえ話では、鳥たちはサタンの配下の者たち、すなわち悪霊である。

(3) 4番目のたとえ話で語られる鳥たちも、「汚れた鳥たち」である。よって、そこでも鳥たちは、サタンの配下の者たち、すなわち悪霊である。

(4) これらの鳥たち、すなわち悪霊たちは、キリスト教界の中で展開される様々な宗教活動（それらは一見すると聖霊の活動に似せた偽物である）を操っている。さらに、様々なオカルトに向かわせる、あるいは背教的な活動に陥らせる。

4. このたとえ話の要約

(1) からし種はキリスト教界である。

(2) この種は、異常な成長をし、外面的には規模を拡大して、怪物的存在になる。

(3) そこは、鳥たち、すなわちサタンの配下の者たちである悪霊の休み場所となる。

(4) 様々なおかしいカルト的教会やその他の宗教運動が起きる。それらはキリスト教界の一部であるが、真の聖書的信仰に属するものではない。

奥義としての御国に関するたとえ話 5番目 「パン種」

1. 5番目のたとえ話「パン種」(マタイ 13:33)

2. このたとえ話の2つのポイント

(1) 「奥義としての御国」には、偽りの宗教システム（複数）が入り込む。

(2) その結果、教理の変質が起こる。

3. このたとえ話の解釈：女が、パン種をとって、3サトンの粉に中に入れる。

(1) 「女」が象徴的に用いられると、それは偽りの宗教システムを指す(黙 2:20、17:1~8)。

(2) 「パン種」が象徴的に用いられると、罪、特に偽りの教理を指す。

(3) 「3サトンの粉」の中には、どこにもある程度のパン種が入っている。「粉」は、「奥義としての御国」、言い換えれば「キリスト教界」である。3という数字は、ローマ・カトリック、東方正教、そしてプロテスタント、このキリスト教界の主要な3つの教派を指す。したがって、キリスト教界は、どの教派であっても、いずれもが、多かれ少なかれ何らかの誤った教理を持っている。

4. このたとえ話の要約

「奥義としての御国」、すなわち「キリスト教界」は、その主要な3つの教派、ローマ・カトリック、東方正教、そしてプロテスタント、それらすべてが、それぞれに何らかの点で、変質した教理を内包している。

奥義としての御国に関するたとえ話 6 番目 「隠された宝」

1. 6 番目のたとえ話「隠された宝」(マタイ 13 : 44)
2. このたとえ話の解釈 :
 - (1) 「宝」が象徴的に用いられると、それは神の民であるイスラエルを指す(出 19 : 5、詩 135 : 4)。
 - (2) イスラエル民族の中で救いを受けるのはレムナント、すなわち真の神の民である「イスラエルの残れる者」である。
 - (3) このたとえ話が教えるのは、「奥義としての御国」の時代に、イエスをメシアとして信じるユダヤ人が起こされるということである。
3. このたとえ話の2つのポイント
 - (1) イエスは、畑の中に隠された宝を買い取った。その代価は、十字架において流したご自身の血である。
 - (2) この時点では、イエスは宝をまだ手にしていない。宝が埋められている畑を買っただけである。
4. このたとえ話の要約
イエスは、ご自身の死によって、「この世」を買い取った。「イスラエルの残れる者」は、「この世」の中にある宝である。よって、多くのユダヤ人がイスラエル民族の中から召し出され、信者となるであろう。

奥義としての御国に関するたとえ話 7 番目 「真珠」

1. 7 番目のたとえ話「真珠」(マタイ 13 : 45~46)
2. このたとえ話の解釈 :
 - (1) 「宝」が象徴的に用いられると、それは神の民であるイスラエルを指す(出 19 : 5、詩 135 : 4)。しかし、「真珠」については、聖書のどこにもそれを象徴的に用いている例はない。
 - (2) キリスト教界はユダヤ人と異邦人とから構成されるということを念頭におくと、この高価な真珠についてのたとえ話は、先の「隠された宝」と対の関係にあるたとえ話であると推測される。
 - (3) 宝がユダヤ人であるとすれば、真珠を異邦人であると想像するのは自然であろう。
 - (4) 真珠は海から採れる。聖書では「海」が象徴的に用いられると、それは異邦人の諸国民を指す。
3. このたとえ話のポイント
 - (1) 主要なポイントは、ユダヤ人だけでなく、異邦人もまた、イエスがメシアであるという知識を得て、救いを受けることになる、ということである。
 - (2) 細かい点では、次の3つのポイントがある。
 - ① 教会に属する異邦人は、メシアに買い取られた者たちであり、メシアの所有となった者たちである。
 - ② 教会に属する異邦人は、徐々に形成されていく。あたかも、貝の内側に入り込んだ異物のまわりに真珠層が少しずつ形成されて、真珠が大きくなっていくように、である。教会時代の基本的な目的の一つは、異邦人の中からメシアの名をもって呼ばれる信者を呼び出すこと、その宣教は救われるべき異邦人の数が満了するまで、である。これを絵に描いたのが、このたとえ話である。

- ③ 真珠が海の中から引き上げられてはじめて人の手に入るように、教会に属する異邦人もまた、その居場所から引き上げられてはじめて、メシアのものとなる。よって、教会は、その所在する場所から引き上げられる。これは携挙である。

奥義としての御国に関するたとえ話 8 番目 「地引網」

1. 8 番目のたとえ話「地引網」(マタイ 13 : 47~50)
2. このたとえ話の 3 つのポイント
 - (1) この時代は、異邦人の裁きによって終わる。
「海」は、聖書においては「異邦人の世界」を象徴する(ダニ 7 章、黙 13 章、17 章)
 - (2) 正しい者たちは、メシアの王国に入る。
 - (3) 悪い者たちは、除外される。
3. ここではたとえ話で語った内容について、イエスが弟子たちに詳しく教えた箇所=マタイ 25 : 31~46

奥義としての御国に関するたとえ話 9 番目 「家の主人」

1. 9 番目のたとえ話「家の主人」(マタイ 13 : 51~52)
2. このたとえ話の 2 つのポイント
 - (1) 「奥義としての御国」のある面は、過去からすでに存在した「神の国のプログラム」の側面と同じである。
 - (2) 「奥義としての御国」の他の面は、新しいものであり、旧約聖書では全く明らかにされていなかったことである。すなわち、奥義としての面を持つ。

まとめ

1. この時代を通して、福音宣教の種が蒔かれる。
2. 種はそれ自体の中に自ら芽を出し、成長していくエネルギーを持っている。
3. 悪魔は対抗して、似つかわしい偽の種を蒔く。
4. キリスト教界は、外見的には大きく成長したかのように見える。実体は、そこに悪霊たちが巣くう。
5. キリスト教界は、変質した教理を内包する。
6. しかし主は、イスラエル民族の中からレムナント(イスラエルの残れる者)を得る。
7. また主は、異邦人の中からも人を得る。これにより、ユダヤ人と異邦人、宝と真珠とによって教会を形成する。
8. この時代は、異邦人の裁きによって終わる。正しくない者たち=不信者たちは除かれ、正しい者たち=信者たちは、メシアの王国に入る。
9. 「奥義としての御国」のある面は、それまでの神の国についてのプログラムと同じであるが、他の面は全く新しい。

次回は、オリーブ山の説教 大患難期についてのたとえ話 です。